

宇都宮大学留学生センター・ニュース

【学内報】

第17号 2011年6月

留学生センター長挨拶

橋川 眞彦

2010年10月1日現在、本学の留学生数は、前年同期よりも15名(4%)増の367名になりました。留学生の国籍は、37カ国・地域であり、中国からの留学生が最も多く、ベトナム、韓国がこれに続きます。留学生の内訳は、国費留学生31名、マレーシア政府派遣18名、私費留学生318名であり、学部・研究科別では、国際学部・国際学研究科146名、教育学部・教育学研究科42名、工学部・工学研究科125名、農学部・農学研究科29名、留学生センター9名、連合農学研究科16名となっています。国際学部・国際学研究科の受入数が最も多いことは、本学の特徴といえます。

さて、昨年11月5日(金)、本学が当番校となり「平成22年度国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会」が文部科学省講堂を会場として開催されました。留学生・国際交流課職員は、前日から泊まりがけで会場準備等に追われていました。参加者は91大学4組織から約230名で、大変充実した協議会でした。今後の大学のグローバル化や国際交流、留学生受入・派遣指導などに役立つ内容でしたので、簡単に紹介しておきます。

まず、進村武男学長の挨拶から始まり、午前中は主に文部科学省の行政説明が中心でした。科学技術・学術政策局国際交流官補佐より「科学技術における国際協力の取組」に続き、高等教育局高等教育企画課国際企画室長より「大学の国際化と学生の双方向交流について」説明があり、①日本人の内向き指向、②大学キャンパスが世界のるつぼ化し、文化の多様性が反映される状況が生まれていないこと、③受入が中心で、キャッチアップ型の留学生政策の抜本的強化が必要である



ことなどが、課題として指摘されました。上智大学総合人間科学部北村友人准教授の「グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する実証的研究」では、①学生の現代的学習ニーズへの対応と国際水準での教育の質向上、②頭脳獲得の手段、③国際連携の活発化、④研究能力の向上などの提案がありました。

午後からは、国立大学法人財務・経営センター金子元久教授の「大学の国際化に向けた課題—短期留学を中心に—」では、短期留学の意味として①異文化理解、②言語・コミュニケーションの素地作り、③これまでと異なる生活・社会経験をあげ、学生の人格的成長への効果を強調していました。国際基督教大学日比谷潤子副学長からは「ICUの留学生交流—短期留学の展開—」と題して事例紹介があり、ICUですら留学希望者が減少傾向にあることやICU独自の留学プログラムについての現状と課題を報告していただきました。

最後に、「海外協定校との短期留学生の派遣・受入れと大学の国際化」をテーマに、1時間半にわたるパネル・ディスカッションが、私がモデレータの大役を



留学生との交流会（栃木県留学生交流推進協議会）での挨拶

仰せつかり行われました。名古屋大学渡辺芳人副総長、千葉大学新倉涼子国際教育センター長、国際基督教大学日比谷潤子副学長から、それぞれの大学の取組の現状と課題について報告があり、それらに基づいてフォーアの参加者を交えて質疑応答をいたしました。大学の規模も理念も協定校も異なる大学の例であり各大学固有の問題もありましたが、留学生の受入先と派遣先のアンバランス問題、日本人学生の内向きの克服、留学生 30 万人計画への対応など、我が国の大学に共通する課題のあることが共通理解できました。

閉会后、会場を移し、石田朋靖理事の挨拶・金森越哉文部科学審議官の乾杯に始まる情報交換会が開催されました。この協議会を通じて、宇都宮大学のグローバル化と留学生政策を考えるための貴重な体験ができましたことを感謝いたしております。

日本、ありがたい

呉 時超 (国際学部・2年)

日本に来てから、もう2年間が経ちました。でも、来たばかりのことはまだ昨日のことに覚えています。もちろん、その中にはアルバイトをしながら受験勉強をしていた時の辛さや、アルバイト先、あるいはまた日本語学校で大勢の人々と出逢った時の楽しさなどいろいろなことがあります。ですが、今日皆さんにお話したいのは、中国への一時帰国のことであります。



去年 (2010 年) の夏休みを利用して、8 月 23 日から 9 月 6 日にかけて、上海に帰国しました。2 年ぶりに両親と会える楽しみとともに、上海万博会が見られることもあり、飛行機に乗りながら、すでに心がときめいていました。



その上海万博会には 8 月 29 日に行ってきました。しかし、この日のことについては、今は失望的な気持ちしか持てません。当日は、中国館の予約券をもらうために、朝の 5 時 (北京時間) に友人と待ち合わせして、万博会の玄関へ行きました。6 時になると、後ろの列の端が見えないほど並んでいました。7 時になると、第一段階のドアが開いて、皆は走って次のドアのところへ行きました。そして、そのドアの前でまた並びます。さらに、9 時にそのドアが開いて、皆はそれぞれ行きたい館に向かって、再び走って行きました。ところが、私たちは朝の 5 時から並んでいたのに、中国館の予約券を手に入れることができませんでした。中国館に入ることはできなかったのです。そのときのがっかりした気持ちは未だにはっきりと覚えています。その後、中国館は仕方がないのであきらめて、日本館をめざすことにしました。日本館も長蛇の列で、私たちは 5 時間かかってようやく入ることができました。

上海万博で今も心に残っているのは、見学したいろいろな展示品のことではありません。日本館の前で並んで待った「5 時間」のことです。その 5 時間に、私はいろいろなことを考えさせられました。人々が何かものを食べながら歩いていることや、ごみが地面に置きっぱなしになっていることなど、いわばそういう「風

景」が強く印象に残っています。また私にとってそれ以上に印象的な「風景」は、ある欧米人が列の外から、並んでいる私たちを写真に撮っていたことです。その時私は自分が動物のような存在に思えました。つまり、あの欧米人が観光客であるとすれば、万博会は動物園であり、館に入るために列を作っている私のような人々はその動物園の檻の中にいる動物なのではないか、そんな気持ちにさせられたのです。日本館から出たのは、すでに夜の4時に過ぎでした。万博会を出た時は、なぜか悲しくて、悔しくて、もういい、もう二度と上海万博へ行きたくないという気持ちしかありませんでした。



一方、上海万博会に行ったほかの友達の話ですが、彼は、一日の間に中国館、日本館、サウジアラビア館など、大きな館はすべて回ることができたといっています。彼はお金にものを言わせたのです。朝5時から並ぶ代わりに、お金で人を頼み、券を求めて並ばせた。自分はといえば、入場の時間に合わせてそこへ行き、悠然と館に入ったということです。こんな話を聞いたら、彼はずるい人だと思う人がいるかもしれません。しかし、それもこれも要はお金に魅力があるということの証ということになるのではないのでしょうか。著しく発展しているように見える現代中国ですが、そこには実際にお金に困っている人がまだまだ大勢いるではありませんか。そこからはその裏返しで、お金があれば何でもできる、という中国の民衆の考えを垣間見ることができるように思えます。今回の帰国によって、豊か

になっているような中国は、実はまだ途上国に過ぎないという事実を実感しました。

日本に来ることによって、私は自分自身の視野が広がり、新たな目線で物事を見ることができるようになったと思います。中国人である私は、言うまでもなく心から中国のことを愛しています。また、自分が中国人であることを誇りに思っています。しかしその一方で、日本に対する尊敬の念、ありがたいという気持ちを変わることなくずっと持っています。日本に来て、周りの人から見習ったこと、日本語学校や宇都宮大学で学んだ「知恵」、さらに、日本に来て中国では体験できないことを体験できるようにもなりました。中でも特に、日本に来たことで、客観的な立場で中国を見直すことができるようになりました。中国人ですから、中国を非難するのはおかしいことかもしれません。でも、中国人だからこそ、正しい目で中国のことを見直すことができなければなりません。「愛国者である我々たちは、国の現状を変えなければならない。」ということは、日本からの教えであります。

日本に来てからも、悲しいこと、悔しいこと、さびしいことはむろんいっぱいありました。しかし、日本に来られるということ、そして今実際日本に来ているということ、それは私にとって本当に幸せなことなのです。この場を借りて「日本、ありがたい」と心より申し上げたいと思います。

卒業を控えて～留学体験を中心として

和田 薫（国際学部・2010年卒業生）

ここで少し僕の大学生活についてお話ししましょう。拙い話ですが聞いてやってください。

高校生の時に図書館に通い詰めていた僕は、勉強や読書の合間に写真集を読みあさるのが趣味だった。特にロバート・キャパ、アンリ・カルティエ・ブレッソン、セバスチャン・サルガドなどのフォトジャーナリストに憧れ、紛争や貧困に関心を寄せた僕は宇都宮大学国際学部に入學。大学生活の理想と現実のギャップ

に落胆しながら、日々つまらない生活を送っていた。そんな僕にとっての最初の大きな体験が、リソース・ネットワークという学生 NGO のスタディーツアーでインドに行ったことだった。2 週間という短い時間だったが、ムンバイのスラムを歩いた時のあの緊張感と匂いが忘れられない。帰国後、FACT という名で、ドキュメンタリー映画の上映・鑑賞を目的とするサークルを立ち上げ、ひとりぼつぼつと活動を開始した。その後 2 年生の春休みに、タイ・ラオス・ベトナム・カンボジアを単独で周遊、スラムを歩き回り、カンボジアでは孤児院に泊まり込みで写真を撮らせてもらった。その時の僕の熱意は、ただ「いい写真を撮りたい」という身勝手なものだったが、彼らと同じものを食べ、見て、遊んで、感じることができ、いい経験だったと思っている。2 年生の夏休みに、マウンテンバイクで宇都宮―沖縄旅行を決行。東京・山谷、大阪・釜ヶ崎、名古屋、北九州などで野宿者のおっさんたちと交流し、野宿し、酒を飲んだ。ただただ暑い夏、僕は黒こげになりながら必死におっさんたちと話し、ホームレスの実態を知りたいと思って駆けずり回った。ひと月かかって沖縄に到着、沖縄本島をぐるりと一周し、野生のヤンバルクイナを目撃するなど貴重な体験をするも、台風直撃、体力も限界のため、帰路飛行機で帰るという体たらく。真黒に日焼けした僕を見て、友人たちは「誰？」と冷たかったことを思い出す。その後、FACT21 という、フリーペーパーを執筆・刊行するというサークルを作り、洞爺湖 G8 サミットやガザ侵攻の折に教授の先生方に協力を得ながら特集を組むなど、短期間であったが精力的に活動した。

さて、ここからが本題。本稿は留学生センターの機関誌に掲載されるというので留学の話をしましょう。僕は三年生のとき、つまり 2008 年 9 月から 10 ヶ月間、中東はシリアのダマスカス大学に交換留学をした。宇都宮大学で 1 年間、松尾先生にアラビア語を教わっていたのだが、挨拶と文法、それと少しの単語を知っているだけという「まったくアラビア語できません」状

態で、僕はシリアの地を踏んだのだった。しかも当時の僕は胸に達するほどの長髪で、そのうえアラレちゃんメガネをかけていたため目立つことこの上なく、「変なメガネをかけた長髪オカマの中国人」としてからかわれた。というのも、アラブ社会では、男の理想像はマッチョ、髭もじゃ、短髪というイメージが根強く、しかも中国人に対する著しい偏見と差別が存在するためだ。長髪で髭の生えない僕のような人間は「オカマ」であり、東洋系の顔はすべて中国人で「チンチャンチョン（中国語がそのように聞こえるのだろう。意味不明）」や「メイド・イン・チャイナ（中国製品が劣悪であるため、中国人の容貌もしかりという意味か?）」などとおちょくられるのだ。中にはチンチャンチョンが単なる挨拶だと勘違いしている悪意のない輩もいるが、一日に何十回もチンチャンチョンといわれるとさすがに頭に来る。最初のころはいちいちチンチャンチョンに反応し、怒りをあらわにしていたが、僕も成長したのか、徐々に気にならなくなる。そのうちチンチャンチョンがかわいらしくも聞こえてくるのだから面白いものだ。しかし、初期のころ僕はからかわれるのがいやで出不精になってしまっていた。そんな僕を支えてくれていたのが「パレスチナへ行きたい」という思いだった。



右から 2 番目が和田君

僕がアラビア語を学び始めたきっかけは、パレスチナ問題に出会ったことだった。大学一年生の時、毎週のように東京に出かけては講演会や勉強会に参加していた。そんな中、日本ビジュアル・ジャーナリスト協

会が主催する講演会で、僕はパレスチナに出会った。紛争でも戦争でもない、「占領」という圧倒的な弱者と強者の力関係の下、パレスチナ人が虐げられる現状。なぜこんなことがまかり通るのか？なぜ解決できないのか？僕は怒りや虚しさを源に、パレスチナ問題を勉強し始めた。そして、パレスチナへ行きたい、そのためにもアラビア語を勉強しようと思いついたのであった。

そんな訳で、近くの八百屋にトマト一つ買いに行くだけでも、チンチャンチョン。ネットカフェに行ったらチンチャンチョン。バスに乗れば冷やかされ、図体のかい男に髪の毛を引っ張られたりもした。「でも僕は負けないぞ。パレスチナに行くためにアラビア語を頑張るのだぞ。」そうして、あっという間に10ヶ月の時間が過ぎた。という風には書くと、シリアの良いところがまったく伝わらない。事実、「苦しい」「つらい」「イライラする」といったネガティブなイメージが、僕のシリアに対する感情の50%を占めているのは確かである。でも残りの半分は、「シリア大好き」なのだ。だから、シリアのいいところもちょっとは書いておかないといけないね。では、僕はシリアのどこが好きなのか？それは、野菜・果物が安くて美味しく、ビールが安くて、料理が安くて凄く旨くて、美人が多くて、人々が馬鹿みたいに優しいところだ！



シリアでの楽しくもつらい10ヶ月の間に、僕のアラビア語はぐんぐん上達し、アラビア語の方言も少しずつ話せるようになっていった。そして、レバノンと

ヨルダンのパレスチナ難民キャンプを訪問した後、2009年8月中旬。パスポートにダダダッと押された10ヶ月分のシリア・ヴィザ・スタンプのおかげで、イスラエル国境にて「なんでシリアなんか10か月もいたんだ？お前はシリアのスパイか？このヤロー！」というような2時間にも及ぶ尋問を受けるも、なんとか入国を許され、長旅の疲労を両肩に背負い込んだまま、エルサレムに滞在していた日本人S氏のところに転がりこんで、重たいバックパックを下し、ふうーとひと息ついて、やっとこさ念願のパレスチナでの生活が始まったのだ。そこで僕が何をやっていたのかというと、まずNGOのオフィスを訪問し資料をかき集め、UNRUWAや現地NGO職員に同行取材(見学?)をお願いし、ヘブロン、ナブルス、ラマッラー、カルキリヤ、ベツレヘムなど西岸地区中の都市をめぐり、アラビア語でその生活や問題を聞きまわった。酷暑の炎天下、ビーサンを減らしながら歩きまわり、ちょっと木陰で一服、んでまた歩きまわり喋りまわり聞きまわり食いまくるということを毎日毎日していたのだ。まあ、毎日毎日そんなに真面目なことばかりしてた訳では決してなく、タイバーというパレスチナ・ビールを飲んで酩酊し、ジャマールというパレスチナ煙草を吸ってポカーんとし、パレスチナ美人に鼻の下をのぼし、青年たちとエロ話で、でへへとしていたことも確かであるのだが。

ここで僕が見てきたことをすべてお話することはできない。だけど、僕がパレスチナに行って、一番強烈に感じたこと、それだけなら言える。分離壁、入植地、土地接收、家屋破壊、市民権剥奪、イスラエル兵からの暴力、移動の自由の侵害などなど、非日常的な想像を絶するほど強固な問題がパレスチナには存在していて、それがまったく当り前の日常になっていて、そこで当たり前のように人々が暮らしている。占領という暴力が、生活のいたるところすべてに侵食していて、そこで彼ら彼女らは食べ飲みくっちゃべり恋をし生まれ死んでいる。そこに僕はいて、その一部を体験

して、泣いて笑って怒って帰って来た。何も変えられない無力感。それが肩にぼつんと乗っかって。だけど、パレスチナで、彼ら彼女らは「わはは」と笑っている。



あれだけの悲惨な歴史、状況、日常のなか、明るく生きている。そんな彼ら彼女らから沢山を学び、一回り大きく成長できたかな、と思っている。ただ最後に言っておきたいパレスチナの嫌なところ。それは…ガキが他のどこの国よりチンチャンチョンとうるさいことだ！駄文失礼致しました。

発行：宇都宮大学留学生センター

編集（責任）：若山 俊介

wakayama@cc.utsunomiya-u.ac.jp

お詫びとお知らせ

本号『留学生センター・ニュース』第17号は2010年度3月中に発行を予定していました。しかし、周知のとおり3月11日に東日本大震災が発生、その後の未曾有の混乱、さらに編集担当者の健康上の理由等により発行が大幅に遅れてしまいました。そのため、すでにいただいていた原稿は時宜を逸した感が否めず、一時は本号の発行取り止めも検討しました。しかし、留学生センターでは、せめてそれらの原稿だけでも記録に残したい、残すべきであると判断し、発行に踏み切りました。執筆いただいた呉時超さん、和田薫さん、そして留学生センター長には心からのお詫びを申し上げます。

また、今回よりこの『留学生センター・ニュース』は従来の紙媒体ではなく、Web化したこととお知らせいたします。それにより資源の節約を図るとともに、インターネット上で広く人々の目に触れることを目的とするものです。

いつもご支援ありがとうございます!!!

宇都宮大学の留学生及び留学生センターは地域の多くの団体、個人の方々のご支援、ご協力に支えられています。ここにそのお名前を記すことにより、心からなる感謝の意を表します。(敬称略)

- ・ 栃木県地域留学生交流推進協議会
- ・ 栃木県経済同友会
- ・ 栃木経済交友会
- ・ 栃木県国際交流教会
- ・ 宇都宮市国際交流プラザ
- ・ 那珂川町教育委員会
- ・ 宇大ブリッジ（代表：山根 美佐子）
- ・ いっくら国際文化交流会（会長：長門 芳子）
- ・ あわのフラワーFC（事務局長：高田 優）
- ・ ヒップファミリークラブ（研究員：杉本 恵子）
- ・ 広岡きもの学院（代表：広岡 きい子）
- ・ サンパティック・ダム
- ・ 田村幸子（宇都宮市）
- ・ 川又 益美（真岡市）
- ・ 大村 裕（さくら市）